



ボールルームダンスの特性に関する基礎的研究

實方, 宏海

(Citation)

表現文化研究, 8(1):1-13

(Issue Date)

2008-11-17

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81002890>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002890>



ボールルームダンスの特性に関する基礎的研究

A Fundamental Study on the Characteristics of Ballroom Dance

實方宏海 Hiromi Jitsukata

概要

日本では一般的に「社交ダンス」という名で知られているボールルームダンスが、近年メディアで注目されるようになってきた。そこでの取り上げられ方は、「娯楽」「スポーツ」「学習教材」「リタイア後の趣味」など、多様であり、ボールルームダンスの多面性が表われている。しかし、執筆者の管見によれば、これまでの先行研究の多くは、ボールルームダンスがもたらすそのような多面性のひとつひとつに関心が向けられており、その背景にある、ボールルームダンス固有の特徴について論じてはいない。本研究はこの点に焦点をあて、多様な側面や機能を生み出しているボールルームダンスの構造を明らかにすることを目指している。この目的を達成するために、アマチュアと学生の競技選手を対象として、あらためて始めて踊りあう組み合わせで踊らせ、それまでのダンス経験とは異なる体験がどのような心的経験をもたらすのか、質問紙調査を実施した。

収集されたデータからは、多次元尺度法により、ボールルームダンスの構造を構成する二次元座標を抽出した。そして、座標軸のひとつは、技術の良し悪しや見た目などの「外観的評価」と自分自身の体感を示す「内面的体験」を両極に持ち、もうひとつの軸は、意識が「自分自身」に向いているのか「自分と相手との関係」に向いているのか、という、「自己意識」と「自他意識」を両極に持つことが示唆された。また外観的評価志向性の強いといえる要素が、ボールルームダンスの「楽しさ」とも「踊りやすさ」とも強く関係し、「リード&フォロー」に関する要素は特に相関が強いことも示された。

ここから、ダンスを通じての心の共感・交流、という内面的な要素だけでなく、ふたりでよりよい踊りを生み出すためのテクニカルな要素が、ボールルームダンスの特徴であり、また豊かさの源であろうことが示唆された。

キーワード: ボールルームダンス、社交ダンス、カップルダンス、リード&フォロー、身体文化

Abstract

Ballroom dance is usually called “Shakou Dance” in Japanese, referring the dance form of a partner dance. Ballroom dance shows various aspects, that is, as a new entertainment, as a competitive sport, as an instructive material, or as retiree’s activity. However, earlier literatures have explored only the functional domain of the ballroom dance. It would be necessary to clarify the peculiar characteristics which results these function of the ballroom dance. This research focuses on “pleasure” of dancing activity as characteristics of the ballroom dance, and aimed to find out the factor which lead such pleasure during dancing. The investigation examined; while male and female ballroom dancer, who were stranger each other, carrying their new coupling through the dance, what kind of experience and impression they would have. 35 criteria set to evaluate their dancing experience using 5 ranking and also the criterion of “pleasure” and “easiness and comfortableness”. Then 2-dimensional coordinate was turned out through the analysis by the multi-dimensional scaling. The results were follows; 1) One of the coordinate axis has “External-appearance-oriented” and “Internal-experience-oriented” in two extremity, another “Self-oriented” and “couple-oriented”. 2) Both “pleasure” and “easiness and comfortableness” were correlative with the factor relevant to “External-appearance-oriented”, especially with one of “lead and follow”. Thus the investigation suggested that, as its peculiar characteristics, the ballroom dance has; technical development leading to more sophisticated performance, as well as sympathetic and communicative experience, which have referred in the literature. It is assumed that ballroom dance presents its valuableness with these 2 characteristics.

Keywords: Ballroom Dance, Social Dance, Partner Dance / Couple Dance, Lead and follow, Body Culture

1. はじめに

ボールルームダンスというダンスは知らなくても、社交ダンスであれば、「男女がペアで踊るダンス」とイメージできるであろう。ボールルームダンスとは、社交ダンスの現代的な名称である。英語で“Social Dance”というと、フォークダンスや、ディスコダンスなど、「社交、親睦、交流の場などで踊られる民衆の舞踊」をさすが、日本語の社交ダンスが示すダンスは、英語では“Ballroom dance”（Ball はラテン語の「踊る」Ballare に由来する語であり Ballroom は舞踏室という意味である）と呼ばれている。したがって本稿では、日本において一般に呼ばれている“社交ダンス”ではなく、意味を明確にするために、“ボールルームダンス”と呼ぶことにする。

一般的には依然として「社交ダンス」の名前の方が圧倒的に認知度が高いが、この“ボールルームダンス”は、近年テレビ番組で取り上げられたり、映画の題材になったり、また体育の授業の中で取り入れられるようになるなどして、その注目度が高まっている。たとえば小・中学校におけるダンス授業の必修化が検討されている中で、ボールルームダンスもその教材のひとつとして注目されている。しかし、教育現場におけるボールルームダンスの位置付けは、「ダンス」の教材としてであったり¹、「生涯スポーツ」のひとつとしてであったり²と、はっきりとは定まっていない。

また執筆者の調査によれば、「欧米のダンス文化」、「高度な競技スポーツ」「高齢者の趣味」「テレビでよく取り上げられている流行(娯楽)」など、ボールルームダンスに対する人々の受け止め方はさまざまである³。ボールルームダンスには、メディアで取り上げる題材として最も人々の興味を引く側面もあれば、教育現場に適する側面もあろう。あるいは、生涯スポーツとして、高齢化社会に歓迎される側面や、新たなパフォーマンスアートの世界を切り開くような側面もあるだろう。つまり、非常に豊かな内容をもったダンスなのである。しかし、現実にはボールルームダンスの多様性はまだまだ注目され始めたばかりで、多くの人々は、その人自身が抱くイメージをそのまま「社交ダンス」ととらえているようである。

このように多様な見方をされるボールルームダンスだが、ではいったい、「ボールルームダンス」とはどのようなダンスなのであろう。人がそこに他者と存在して踊っているという形式から、「社交ダンスは男女のコミュニケーションがはかれる」ということを最たる特徴に挙げるができるかもしれない。だが、ひとくちにコミュニケーションといっても、それは非常に多面的な現象であり、

その内実について十分に検討されているとはいえない。例を挙げれば、パーティーの会場でその場その場で自由にステップを組み合わせて踊ることを楽しむことと、競技会の会場で、選手がもつ技術と表現力を出し尽くして白熱する戦いを繰り広げることとは、まったく異なっている。親睦や交流を目的として行われる「社交ダンス」では、コミュニケーションというときパートナーとの会話や、洗練された相手への接し方などが主眼に置かれるのではないだろうか。また、トップのアスリートともいえるダンサー同士の「ダンススポーツ」では、相手の身体の状態を瞬時に鋭敏に感じ取り、それに応じて自分の身体を反応させていくことによって生み出されるダイナミックな動きの応酬、といった生体反応的、力学的なコミュニケーションが生じている。

本研究は、このように多様な側面をもつボールルームダンスに焦点をあてる。その目的は、ボールルームダンスの特性を明らかにすることであるが、まず次章で、ボールルームダンスに関する先行研究について概観しておきたい。

2. ボールルームダンスに関する先行研究

ボールルームダンスを扱った先行研究は、「それらが踊られる場でボールルームダンスがどのような機能を果たしているか」という観点をもつもの、そして「ボールルームダンスを日ごろから踊る人々の身体的、心理的特徴はどのようなものか」という観点をもつものに分けることができる。どちらの研究や報告も、ボールルームダンスを深く知る上で重要な示唆を与えている。しかし、どちらの研究も「ボールルームダンスを踊ることで、ある成果が生み出される」という、ボールルームダンスの機能について言及しているもの、これらの機能を生み出している「ボールルームダンス固有の特性」については十分には触れられていない。

たとえば、ボールルームダンスの競技団体である、財団法人日本ボールルームダンス連盟(Japan Ballroom Dance Federation/以下JBDF)は、2002年「学校体育学習支援プロジェクト」(翌、2003年「学校学習創造支援プロジェクト」と改名)を立ち上げ、全国体育学習研究会と連携し、また、モデル校を指定して、ボールルームダンス学習の授業研究を行ってきた。その報告も公開されており⁴、また、各教員による自主的な取り組みの報告もある⁵。これらの実践報告では、総じて、「ボールルームダンスの学校活動における機能」という、限られた文脈での言及である⁶。しかも、それらは「ダンスを通して体を動かす楽

しさを知った」「もっとやりたい。次はもっと難しいものも習いたい」⁷といった、ボールルームダンスというよりは、ダンスという日常ではない体験そのものがもたらす機能が語られているといつてよい。

ボールルームダンスの学校教育指導の手引書や、JBDFの作成したボールルームダンスのあり方について検討した答申⁸などでは、お互いを理解しあい、気遣い、共感しあうことをボールルームダンスの目指すところと示している。しかし、こういったことは、他の形態のダンスでふたりあるいはそれ以上の人数で踊ることと何か違いがあるのだろうか。あるいは、男女がふたりで相手を変えながら踊る中で、さまざまな音楽や、変化に富んだステップなども加わって、豊かな感情を経験することは、フォークダンスやクラブでのダンスを踊ることとどのように違うのであろうか。また、自由にステップを組み合わせたり、ステップに変化を加えたりする創作的な活動は、創作ダンス作品を作り出すことと、創造性においてどのような差異があるのだろうか。

学校教育現場を対象としたボールルームダンス研究で触れられていることは、「ボールルームダンスを踊ることで生み出された成果」であり、その背景でこういった機能を生み出している「ボールルームダンス固有の特性」について深く考察されていない。そのため、同じく学校教育現場で踊られるであろう他のダンスとの特異性が見えにくくなっているのである。

ボールルームダンスを踊る人々の身体的、心理的特徴についての研究は、生涯スポーツとして、あるいは競技会でボールルームダンスを日ごろから踊る人々が対象にされている。生涯スポーツとしてのボールルームダンスを対象とした研究では、調査対象が中高年齢層で占められており^{9,10}、一方、若年齢層は競技選手が対象となつて、スポーツ選手としての体力特性を調査した例がある^{11,12}。また、ボールルームダンスのステップの一部を取り出し、そこから帰納的にボールルームダンスの動作特性記述を試みた研究では、プロのボールルームダンサーと、大学のボールルームダンス部に所属する学生が調査対象となっている¹³。共通して言えることは、これらの研究では調査対象がボールルームダンスに日ごろから親しんでいる人々に限定されていることである。さらに言えば、その内容が、「ボールルームダンスを習慣としている人々の身体や心理特性」に限定されている¹⁴。

以上のように、ここまで概観してきた先行研究は、多層性と多面性を見せるボールルームダンスの「固有の特性」を理解する上で、決して十分とはいえないのであ

る。本研究では、このような「ボールルームダンスの特性」を見る指標として、先行研究で語られている「楽しさ」「おもしろさ」「心理的な快感情」などを総合して、「楽しさ」に焦点を当てた。そして、踊り手がボールルームダンスを踊るまさにそのとき、どのような要因が「楽しい」という機能をもたらししているのかを探る。

3. 方法

3.1. 調査対象

調査対象者は、大阪府、京都府、奈良県在住の現役競技ダンス選手4名(以下熟練者)と、K大学競技ダンス部員6名(以下学生)で、その種目¹⁵と組み合わせは以下の通りである。

《スタンダード種目》

26歳男性熟練者、25歳女性熟練者、男子学生2名、女子学生2名。組み合わせは、熟練者ひとりにつき、ふたりの学生と踊ってもらえるように決定した。

組み合わせ

- ・26歳男性熟練者→女子学生1名との試技で双方から回収される2サンプル
- ・もう1名の女子学生との試技で双方から回収される2サンプル
- ・25歳女性熟練者→男子学生1名との試技で双方から回収される2サンプル
- ・もう1名の男子学生との試技で双方から回収される2サンプル

計8サンプル

《ラテンアメリカン種目》

50歳男性熟練者、28歳男性熟練者、女子学生2名
スタンダード種目同様、熟練者ひとりにつき、ふたりの学生と踊ってもらえるように決定した。

組み合わせ

- ・50歳男性熟練者→女子学生1名との試技で双方から回収される2サンプル
- ・もう1名の女子学生との試技で双方から回収される2サンプル
- ・28歳男性熟練者→女子学生1名との試技で双方から回収される2サンプル
- ・もう1名の女子学生との試技で双方から回収される2サンプル

計8サンプル

以上16サンプルが分析対象である。

3.2. ダンスの種類および動きの設定

ダンスの種類¹⁵ およびアマルガメーション¹⁶ はプロの競技選手に依頼し、ダンスの基本技術の技量が十分

に問われるフィガー¹⁶を含む種目を選び、そのフィガーをもとに組み合わせで構成した。アマルガメーションは、通常のボールルームダンスと同様、最初のフィガーに戻るように作り、実験では1分30秒間繰り返し踊ってもらった。調査対象種目および各種目のアマルガメーションは、【表1】および【表2】参照のこと。1分30秒という時間は、実際の競技会で踊られる標準的な長さである。また、競技会では規定されていないジルバというダンスについても、被験者の緊張をほぐすために、試技の前に踊らせた。ジルバは、パーティーなどでは盛んに

踊られる種目である。学生の場合は、新入部員として入部したてのころにまず覚えて踊る種目の代表的なものである。なお、ジルバはパーティーで気軽に踊られるダンスなので、最初からアマルガメーションを決めて踊られることはあまりない。したがって、ジルバだけはリーダー¹⁶となる男性に自由にフィガーを組み合わせで踊ってもらった。

3.3. 実験の手続き

実験は、2007年9月8日（土）、神戸大学発達科学部にて実施した。

熟練者と学生は、実験会場に入るまではそれぞれ別の控え室に待機させ、互いの素性が判らないようにした。これは、競技会場などで見たことがある者であった場合に、踊る前から相手に対するイメージを抱いてしまうことを避けるためである。

実験では、一度に二組同時に踊ってもらった。予備実験¹⁷を通じて、一組だけで踊ることが被験者に過度の緊張を強いる場合があることが見られたので、複数組が同時に踊る競技会やパーティーなど、ボールルームダンスが踊られる環境により近付けるように設定を変更した。踊る相手は事前に控室で知らせておき、誘導者の指示で実験会場に入った後に互いのパートナーを確認させた。

最初にジルバを踊ってもらい緊張をほぐした。このジルバも、今回初めて踊るふたりがどのような反応をするかという設定にふさわしいと考え、調査対象とした。その後、スタンダード種目を踊るものはワルツ二種類を、ラテンアメリカン種目を踊るものはチャチャチャとルンバを踊り、間に小休憩を挟んで、もう一度同じ二種目を踊ってもらった。二種目をどのような順番で踊るかは執筆者がランダムに設定して、踊りだす前に口頭で提示した。また、休憩は任意であり、休憩を取るか、取らずにそのまま踊り続けるかは、執筆者が口頭で被験者たちに確認した。一試技の流れについては【図1】参照のこと。試技終了後、別室にて調査用紙の回答を求めた。

表1 調査対象種目

スタンダード種目	ラテンアメリカン種目
ワルツ1	ルンバ
ワルツ2 (ジルバ)	チャチャチャ (ジルバ)

表2 各種目のアマルガメーション

スタンダード種目
ワルツ1 ナチュラルターン→スピントーン→リバーターン→ ホイスク→最初へ
ワルツ2 ナチュラルターン→オーバーターンニングロック→ ナチュラルランニングウィーブ→シャッセロール→ スローアウェイオーバー→スウェイ→シャッセ→最初へ
ラテンアメリカン種目
ルンバ オープンヒップツイスト→ファン→アレマーナ→ クローズドヒップツイスト→ファン→ ホックスティック→最初へ (実験では指示ミスがあり“ファン”から“アレマーナ” に戻っているが、結果に支障はないと判断し採用した。)
チャチャチャ オープンヒップツイスト→ファン→ホックスティック→ シャッセ トウ ライト→ニューヨーク→ シャッセ トウ レフト→ニューヨーク→ スプリットキューバンブレイク→スポットターン→ 最初へ

スタンダード種目

ジルバ (1' 30")	練習 (3' 00")	種目1 (1' 30")	種目2 (1' 30")	休憩	種目1 (1' 30")	種目2 (1' 30")
-----------------	----------------	-----------------	-----------------	----	-----------------	-----------------

ラテンアメリカン種目

ジルバ (1' 30")	練習 ルンバ (1' 30")	練習 チャチャ (1' 30")	種目1 (1' 30")	種目2 (1' 30")	休憩	種目1 (1' 30")	種目2 (1' 30")
-----------------	--------------------	---------------------	-----------------	-----------------	----	-----------------	-----------------

教示について(共通)

*練習時間終了後、時間の延長の必要があるかないかを確認。

*どの種目を踊るかは知らせておらず、踊りだす直前、図中の太線のところで口頭で提示。

*休憩は任意であり、休憩を取るか、取らずにそのまま続けるかは、口頭で被験者たちに確認。

図1 試技の手順

3.4. 音楽の設定

音楽は、関西学生競技ダンス連盟所属競技ダンス部のホームページ¹⁸に掲載されていた、2007年度試合使用曲、および、社交ダンスCD専門店のホームページ¹⁹掲載の、2006年日本インターナショナル選手権大会予選使用曲を参考に、近年の競技会でかけられる曲が収録されているCD数枚から編集した。その際に、競技会や練習では普段あまりかからない曲調で踊ることの影響も調査するため、競技会ではあまり使われないような、ボールルームダンス用に編集されたCDからではなく、一般の洋楽CDからアーティストチックな曲または、ポップス調の曲も選んだ。

3.5. 調査用紙の作成

調査は一試技終了ごとにその試技でのダンスを振り返っての回答を得た。調査項目は、予備調査で得られた自由記述を勘案し、さらに先行研究^{20,21,22,23}、ボールルームダンス教師の助言等を総合的に考慮して、35項目で構成した。そして、問1として、踊っている間これらの項目についてどのくらい感じたかについて、5段階評価を行わせた。さらに、問2で、これら項目との関係を見るために、「楽しさ」について5段階評価を行わせた。また、問3で、「踊りやすさ」についても同様に評価させた²⁴。さらに、自由記述の欄を設け、感想のほか、ダンスを振り返ってなぜ「楽しさ」「踊りやすさ」をそのように回答したのか理由を記述させた。項目については【表3】参照のこと。

表3 回答を求めた35項目

項目番号		データ処理時の略称
1	2人がリズムを共有して踊っていた	1 リズム共有
2	2人で気持ちをひとつにして踊りを決めようとする意識が感じられた	2 気持ちをひとつ
3	あまり色々考えずに無我夢中で踊れた	3 無我夢中
4	いつもの相手より、相手にうまく動きを引き出せてもらった	4 引き出してもらった
5	ピクチャーがうまく決まっていた	5 ピクチャー
6	異性と踊ることが楽しかった	6 異性と踊る
7	音楽が好みのものだった	7 音楽が好み
8	回数を重ねることで緊張がほぐれた	8 緊張緩和
9	好きな種目だった	9 好きな種目
10	自分が心を尽くす存在(リーダーもしくはパートナー)がいることが嬉しかった	10 心づくし
11	自分の感情を踊りにこめて踊れた	11 感情をこめる
12	種目の特徴を表現できた	12 種目の表現
13	純粋に二人で踊ることが楽しめた	13 2人で踊る
14	人に評価される場面ではなかったから気楽だった	14 気楽
15	相手とのホールドが普段の相手より組みやすかった	15 ホールド組み易さ
16	踊っていて楽しいステップだった	16 楽しいステップ
17	相手の動きが自分の想定に近いもので安心できた	17 想定内の動き
18	相手に踊らせてもらうということ自体が楽しかった	18 踊らせてもらう
19	自分がリズムに乗れた	19 リズムに乗れた
20	相手のフォローが普段より自分に合っていた(自分の好むものだった)	20 相手のフォロー
21	相手のリードの強弱が普段より自分に合っていた(自分の好むものだった)	21 相手のリード
22	得意な種目だった	22 得意種目
23	相手との身長差が普段とは違い踊りやすいものだった	23 適切な身長差
24	相手を踊らせるということ自体が楽しかった	24 踊らせる楽しさ
25	自分を信頼し認めてくれる存在(リーダーもしくはパートナー)がいることが嬉しかった	25 自分を認める存在
26	相手をうまくフォローできた	26 フォローできた
27	相手をうまくリードできた	27 リードできた
28	得意なフィガーだった	28 得意なフィガー
29	知らない人と始めて踊ることにわくわくした	29 知らない人とわくわく
30	日常生活では体験できない動きや速さが体験できた	30 非日常の経験
31	いつもの相手より、相手の動きを自分がうまく引き出したという手ごたえがあった	31 うまく引き出した
32	普段の相手とは出来ない踊りが出来た	32 普段はできない踊り
33	普段練習していることが発揮できた	33 練習の発揮
34	回数を重ねることで踊りが良くなってきた	34 回数を重ねる
35	好きなフィガーだった	35 好きなフィガー

3.6. データの処理

得られたデータを、Windows上で作動するSPSS 10.0J BasicおよびMicrosoft Excel 2002の分析ツールによって、以下の処理を行った。

(1)多次元尺度法²⁵によって、問1で回答を求めた35項目の近接関係を求めた。これは、ボールルームダンスの構造を明らかにするためである。

(2)問1で回答を求めた35項目と、問2、問3で求めた「楽しさ」「踊りやすさ」の間のピアソンの相関係数を求めた。これは、「楽しさ」「踊りやすさ」と相関が強い項目がどのような要素をもっているか調べるためである。

4. 結果および考察

4.1. 35項目から抽出できるボールルームダンスの構造

4.1.1. 各項目の関係について

多次元尺度法によって得られた、各項目の共通空間における分布図は【図2】の通りである。なお、各項目

と、実際の調査用紙での質問文との対応は、【表3】を参照のこと。

この図の◆が示すように、X軸とY軸に沿って項目が分布していることが伺える。特に $X < 0$ の範囲では、ほぼX軸に沿って項目が分布している。このことから、ボールルームダンスの構造を、これら軸上の項目によって構成される二次元の軸で説明できることが示される。

4.1.2. 軸の検討

(1) 横軸(X)について

まず、軸上の「7.音楽が好みのものだった」「29.知らない人と初めて踊ることにわくわくした」を中心に、 $X > 0$ の範囲、すなわち【図3】における第1象限および第4象限を見てみる。

この範囲を構成する項目をみると、「楽しい」(24,29)「嬉しい」(10,25)「好き」(7)、ダンスという非日常性もつ特性(30,32)、ステップの特性(9,16,22,35)、男女ふたりで踊るボールルームダンスの特性(6,10,25)に関す

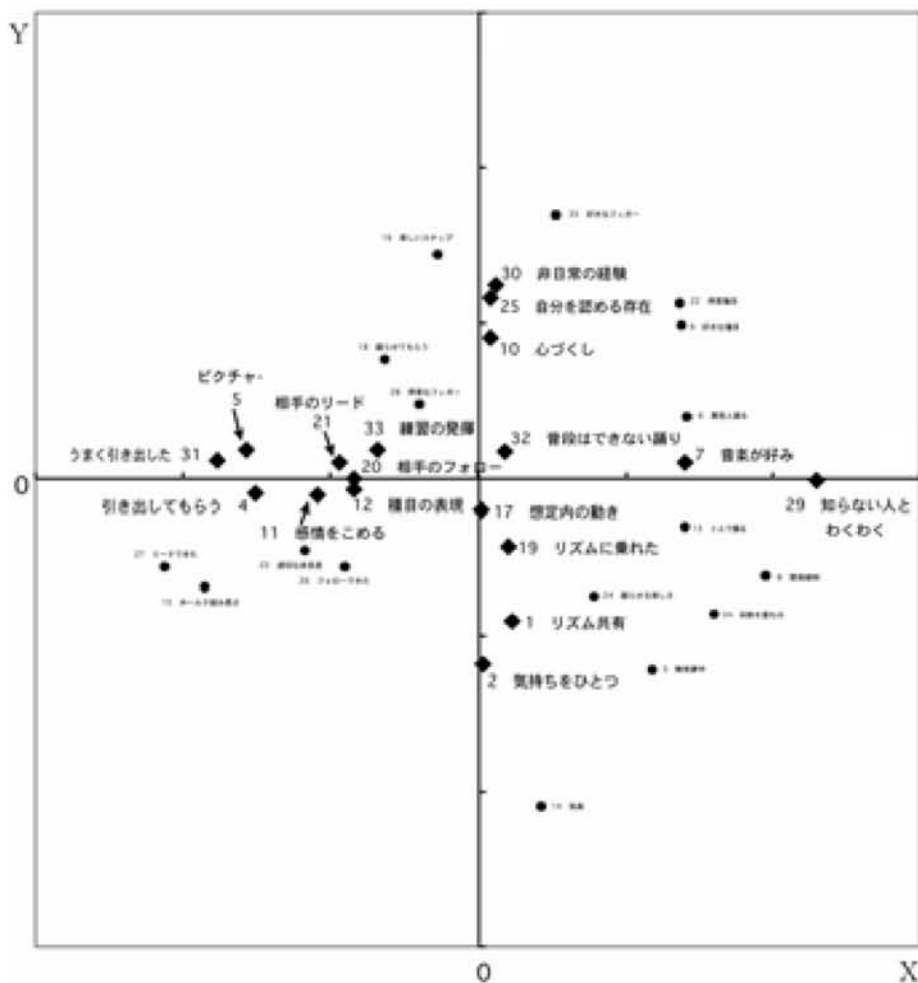


図2 多次元尺度法による35項目の共通空間における分布

る項目も見られる。踊っているものの感覚や気分など内面と関係している項目であることがわかる。

一方でX軸上の $X < 0$ の範囲では、「～ができた」という、外的基準に対する評価的な項目からなっている。第2象限および第3象限の項目も含めて見ると、踊っている者の主観とは別に、リードの良し悪し(4,20,21,31)、形の美しさ(5,11,12)などが挙げられる。理想とするモデルや客観的な基準が外側にあり、そこに自分の踊りを照らし合わせて感じている項目といえよう。

ここまでの検討をまとめると、第2象限および第3象限は踊りそのものに対する客観的な評価を汲み取って感じたことであり、第1象限および第4象限は踊り手が自分自身で直接感じ取ったことであることがわかる。外側からの評価を感じ取るか、内面の体験を直に感じ取るかの点で対照的な二群といえる。

日本のボールルームダンスは「競技志向」か「社交志向」かで志向性が分かれるという実情がある²⁶。この軸に現れた対照的な現象もこの実情を良く反映しているといえる。つまり、外側の評価を感じ取るということは、テクニカルな要素に焦点をあて競技を志向することに通じる。また、内面の体験を直に感じ取るということは、評価とは無関係な自分の気分焦點をあて、「社交」を志向することに通じていると考えて差し支えないだろう。

以上をふまえ、X軸の両極の一方を、技術など、外から見ての評価を志向するという意味で、外観的評価志向、もう一方を、楽しさや好き嫌いなど、内面の直の体験を志向しているという意味で内面的体験志向と命名する。

(2) 縦軸(Y)について

ではY軸上では各項目はどのような関係になってい

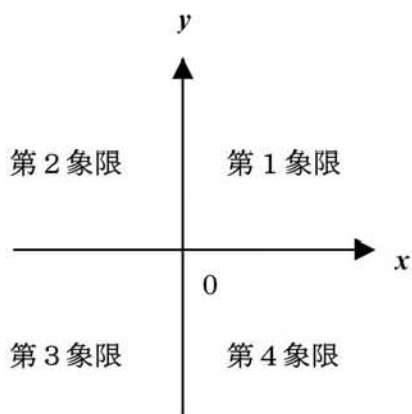


図3 二次元における各象限

るのだろうか。 $X > 0$ の範囲では項目がY軸方向に広く分布しており、これらの項目を検討することが、Y軸決定の決め手となりそうである。

第1象限 $Y > 0$ では「日常生活では体験できない動き」、「フィガー」、「ステップ」、「種目」など、「自分自身のこと」が関心の対象になっており(9、16、30、35)、一方で第4象限 $Y < 0$ では「相手を踊らせる」、「知らない人と踊る」、「普段の相手(との比較)」など「相手」への関心が伺える(24、29、32)。そこで、Y軸方向に「自分」―「相手」という関心の対象が示されていることが推測できる。さらに、今回の調査がボールルームダンスという「ふたりで踊る」ものであることを加味して、単純に「相手」へ意識が向いているのではなく相手と自分の「ふたりで踊ること」に意識が向いていると考えたほうがふさわしいと思われる。

以上から、Y軸の両極を、自分の踊りに意識が向いている―ふたりでの踊りに意識が向いている、すなわち自己意識―自他意識と命名する。決定した2軸を【図4】に、項目分布図と照らし合わせているので参照のこと。

この【図4】で、再び35項目の分布の仕方に注目すると、さらに次のようなことがいえる。

X軸上の、「外観的評価」志向性が強い方向では、 $Y = 0$ 付近に項目が集中している。一方、「内面的体験」志向性が強い方向では、Y方向に幅広く項目が分布している。傾向として、内面的体験志向性が強い項目に関しては、「自己」―「自他」に渡って幅広く向けられているのに対し、外観的評価志向性が強い項目は、そういった広がり相対的には見られない、ということがわかる。

4.2. 「楽しさ」と35項目の関係

「楽しさ」と相関が高かったのは、【表4】に示す項目である。

また、「踊りやすさ」と相関が高かったのは、【表5】の項目である。

以上からは、「楽しさ」とも「踊りやすさ」とも、外観的評価志向性の強い項目と特に関連していることがわかる。一方で、「楽しさ」は「踊りやすさ」に比べると相関の強い項目が第1象限をのぞくすべての象限から抽出されており、ボールルームダンスの「楽しさ」が幅広い要素をもっていることを示した。

また、どちらの項目とも、外観的評価志向の項目の中でも特に「リード&フォロー」に関する項目(4,20,21)と特に相関が強かった。「リード&フォロー」が、ボールルームダンスの特性を語る上で欠かすことのできない

要素であることが示唆されている。つまり、「外観的評価」の志向性は、リードやフォロー、ホールドなど、「ふたりで組んで踊る」テクニックに特に向けられているようだ。つまり、ボールルームダンスにおける「テクニック」はステップや自己の技術にとどまるものではなく、「リード&フォロー」に代表される、「ふたりで組んで踊る」ことに関するテクニックの習得という側面もあると推察される。

5. 総合考察

5.1. ボールルームダンスの構造

今回の調査実験では、【図4】に示すように、ボールルームダンスの二次元的な構造が示唆された。そしてこの座標を構成する二軸の「外観的評価志向－内面的体験志向」「自己意識－自他意識」の両極もそれ

ぞれ抽出された。

この二軸は、踊っているまさにそのときを体験した踊り手たちの声から直接抽出したものである。調査の対象となった踊り手たちが一様に競技選手だった、という点も考慮しなければならないだろう。しかし、初めて向かい合う相手と踊る中で、踊り手は、舞踊の原理²⁷が述べられるような、「未知の体験を共有することで生まれる感情」のみならず、未知の相手なりに「相手の技術」までも感じ取っている、ということがいえる。このことは、自由記述だけで回答を求めた予備実験にも詳しく見ることができる。競技選手でもテクニカルなことと同様自分たちの内面的な、直接の体験も感じ取っている、という記述もあった。予備実験および本実験の自由記述については【表6】【表7】を参照のこと。前章までで、「社交ダンス」の踊り手と「ダンススポーツ」の踊り手に違いがあるこ

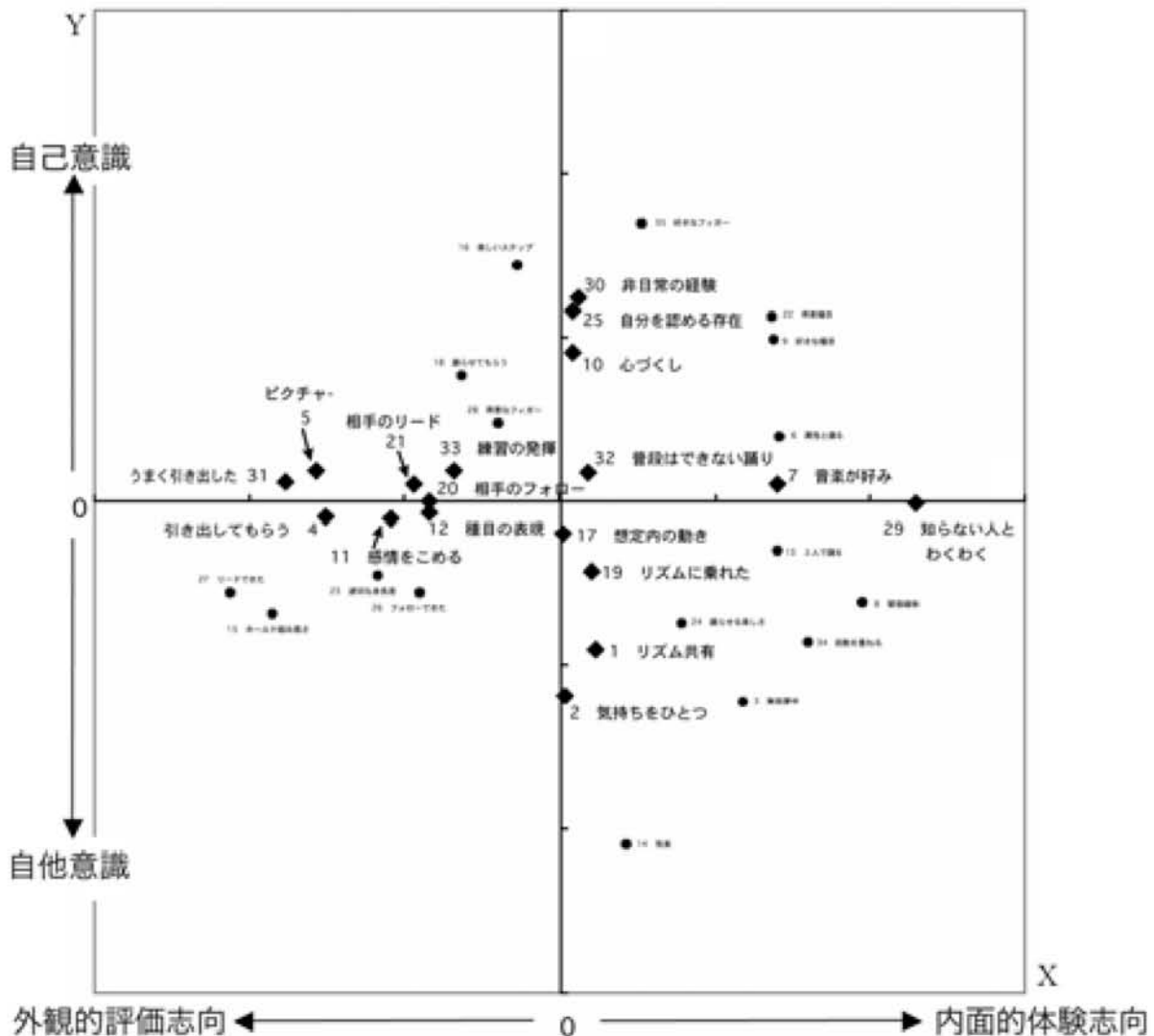


図4 ボールルームダンスの構造を決定する二次元座標

とを述べたが²⁶、一方で、踊っているまさにそのとき、踊り手は「社交志向」に対応する「自分の内面」への志向性と、「競技志向」に対応する「外側の評価」への志向性とをともに持ち合わせている可能性が示唆された。つまり、どのようなレベルでも、「ふたりで踊る」ことで相手とのコミュニケーションを図る、ところから、「ふたりで組んで踊る」ことで生じるテクニック、「リード&フォロー」の巧みさを楽しむところまで、幅広く特性を帯びている可能性が示されたのである。そして、この二本の柱がともにある点がボールルームダンスの特性であるとも言えるだろう。今後の調査で、さまざまなボールルームダンス愛好者、競技者の層を対象とし、より説得力のある結果が得られることを期待したい。

また、「ふたりで踊る」ということ考えたときに、意識が

向かう対象を、「踊っている自分」と「踊っている相手」というような、「自－他」という二極でイメージしやすい。だが、今回の調査で検討された項目からは、「自分－自分と相手」という二極のほうがより適切であることが明らかとなった。ボールルームダンスでは「相手」とは、常に自分と一体の存在であり、「自」と「他」を切り離して考えることの出来ないダンスである可能性が示されている。この点については、個人がソロで踊ることも、ふたりで踊ることも、また群集で踊ることもある、形態の流動的な他のダンスとの比較が必要であろう。

5.2. ボールルームダンスの「楽しさ」から見る特性

小中学校向けのボールルームダンス指導書などを見ると、現在のボールルームダンス振興方策の中で、

表4 「楽しさ」と相関が高かった項目

項目番号		相関係数	座標の位置
4	いつもの相手より、相手にうまく動きを引き出せてもらえた	0.748***	(X<0)
20	相手のフォローが普段より自分に合っていた(自分の好むものだった)	0.745***	(X<0)
21	相手のリードの強弱が普段より自分に合っていた(自分の好むものだった)	0.655***	(X<0)
33	普段練習していることが発揮できた	0.599**	(X<0)
11	自分の感情を踊りにこめて踊れた	0.542**	(X<0)
32	普段の相手とは出来ない踊りが出来た	0.571**	(X>0)
30	日常生活では体験できない動きや速さが体験できた	0.641***	(Y>0)
19	自分がリズムに乗れた	0.598**	(Y<0)
18	相手に踊らせてもらうということ自体が楽しかった	0.611**	第2象限
16	踊っていて楽しいステップだった	0.562**	第2象限
15	相手とのホールドが普段の相手より組みやすかった	0.610**	第3象限
23	相手との身長差が普段とは違い踊りやすいものだった	0.519**	第3象限
13	純粋に二人で踊ることが楽しめた	0.703***	第4象限
3	あまり色々考えずに無我夢中で踊れた	0.518**	第1象限

※p<0.005

※※p<0.001、特に相関が強かった項目。

(影つき枠内は軸上に分布した項目)

表5 「踊りやすさ」と相関が高かった項目

項目番号		相関係数	座標の位置
20	相手のフォローが普段より自分に合っていた(自分の好むものだった)	0.630***	(X<0)
4	いつもの相手より、相手にうまく動きを引き出せてもらえた	0.604**	(X<0)
21	相手のリードの強弱が普段より自分に合っていた(自分の好むものだった)	0.557**	(X<0)
19	自分がリズムに乗れた	0.534**	(Y<0)
23	相手との身長差が普段とは違い踊りやすいものだった	0.814***	第3象限
15	相手とのホールドが普段の相手より組みやすかった	0.608**	第3象限

※p<0.005

※※p<0.001、特に相関が強かった項目。

(影つき枠内は軸上に分布した項目)

「技術への志向」は特に文面上ではあまり前面に出ず、場合によっては注意深く避けられている印象すらある²⁸。JBDFが示した「ボールルームダンスのあり方」に対する答申でも、「人間的な交流」が大きな意義に据えられている。これは、執筆者が前章で示したボールルームダンスの構造を示す座標でいうなら、第1・第4象限の体験であり、さらにいえば「ふたりで踊る」という特性を加味した第3象限での体験、ということになろう。しかし、前節まで述べてきたように、テクニカルな要素、すなわち第2・第3象限での体験も、メンタルな要素と並んで重要なボールルームダンスの「楽しさ」を感じさせる要素であり、決して切り捨てるべきものではない。前節でも述べたように、ボールルームダンスはどのような取り組み方でも、この座標が示す二次元の構造をもっている可能性がある。「楽しさ」についても、社交だから「交流」が楽しい、あるいは競技だから苦しい、(もしくは「技術」の習得、上達が楽しい)という一次元的な構造とは言いきれないだろう。他のボールルームダンス愛好者との比較も待たなければならないが、この二次元の中で、どの象限に特に重きが置かれるか、というところで、取り組みの差が出てくるものと思われる。また、どのような層にいるものでも、バランスよくこれらの象限での要素を体験していることが、ボールルームダンスをボールルームダンスとして踊る、という点で重要なことともいえるかもしれない。現在のボールルームダンス諸組織の意識に即していうならば、たとえ学校教育や生涯学習などの導入的場であっても、「リード&フォロー」の巧みさを、「外側」にある理想のモデルに少しでも近付けようと鍛錬するところ、座標でいうなれば第2・第3象限に位置する要素の体験があるからこそ、創作ダンスやフォークダンスとは違う、ボールルームダンスの特徴がある可能性が示唆されているのではないか。

6. まとめ

冒頭で述べたように、ボールルームダンスに対する人々の取り組み方には、多様性が存在する。先行研究はそのような多様性の一部分に焦点をあてているに過ぎず、そこに「ボールルームダンスを踊ること」そのものがもつ固有の特性を俯瞰する研究の必要性が見出される。本研究は、その基礎段階として、今後のボールルームダンス特性抽出研究の指標作りとして行った。実験は、日ごろからボールルームダンスを踊り慣れているアマチュアと学生の競技選手が、あらためて普段のダンスとは違う状況でダンスを踊ったときに、どのよう

な体験をしているかを調査した。その結果として、ボールルームダンスがその構造として、二次元の軸をもっていることが示唆された。軸のひとつは「外観的評価志向」すなわちテクニックや見え方への志向性と、「内面的体験志向」すなわち踊っている中で生じてくる気分や感情への志向性を両極にもつ。そしてもうひとつは意識が自分自身に向いているのか、自分と相手との関係に向いているのかという、「自己意識」と「自他意識」を両極にもつ。さらに、踊ったときの「楽しさ」は、どこか一極に集中するというよりは、この二次元上に散らばる各要素と関連しあっていた、ということも浮かび上がった。また、「リード&フォロー」というテクニックが、やはり踊っている最中の踊手にとって関心の焦点となっている可能性が示され、先人達が訴え続けてきた、ボールルームダンスにおける「リード&フォロー」の重要性、特異性が客観的に示された。生身のふたりが対峙したときに互いの心を共感・交流させること、互いのテクニックを向上させることでふたりのよりよい踊りが生まれていくこと、この2本の柱がボールルームダンスの特徴であり、またボールルームダンスの豊かさの源であろうことが示唆されたのである。ボールルームダンスは、このような心身の応答から、新たな身体や感情の体験をもてすることに特徴があるといえる。

もちろん、今回の調査の対象は競技選手に限定されているので、抽出した軸も、そこから導いた考察も、ごく一部から得られた「可能性」に過ぎない。すでに述べたように、この研究は対象も限定した、今後の研究のための基礎的調査、という位置付けにある。今後の課題としては、まず抽出された二軸をもとに、より多くのボールルームダンス愛好者、競技者、未経験者を対象とし、その妥当性を検討するとともにより説得力のあるデータを構築する必要がある。また、個人がソロで踊ったりふたりで踊ったり、あるいは群集で踊ったりもする、他のダンスとの比較を行わなければ、ボールルームダンスが、他の舞踊活動、レクリエーションやスポーツ活動とは異なる、独自の価値をもっていることを明らかにするのは難しいだろう。

表6 予備実験「楽しく踊れましたか」という問いに対する自由記述の抜粋

……なんにせよパートナーのフォローがうまかった。一人なら△のところ二人だったからぎりぎり○な印象でした。
初対面どうして、コミュニケーションも全くないまま、組んだので緊張しました。……しかし、ビデオ撮影時は(練習もあったので)、音に合ってくる瞬間も増え、「踊る」ということを純粋に楽しめたように思います。後リーダーさんのリードのスタイル自体、私の好むものに近かったのも、そのあたりも影響し、初対面にしては楽しく踊れました。
踊っているときに考えたことは普段自分が練習していることを意識してその部分を直そうと努めた。あるいは場所が狭かったのもその中でどういうステップを踏んで踊るかなどを考えた。
突然だし、知らない人だし、年もちがうし、会話もなくな雰囲気でしたが、わけもなく楽しかったので(楽しく踊れたかという5段階評価に対して)「5」にしました。「きっと緊張してるんだろうな」とか、「あー私下手やなあ」とかいつもしているダンスとはちがいが、気楽にできたからかなと思います。…… (組んでみて安定感がなく、音楽に合わせて動くことしかできなかった。)どんなリーダーでも躍りこなして素敵に見えるパートナーになりたいし、自分はまだまだだめだと思いました。
(実験という雰囲気の中で楽しく踊るのはかなり難しいし、)あと、まだ単純に踊っていて楽しいと思える段階に達していません。リードについていくのが精一杯という感じで、実験なのでさらに緊張も加わって余裕をもって曲ののって踊れなかったです。やっぱり満足のいくダンスができなかったのも、もっと練習してうまくなりたいと思いました。
リードがはっきりしていて、動きが明確だったので、楽しむ余裕ができた。……音楽にのって踊っている感覚があったため楽しかった。
楽しさに関しても緊張の支配域が大きかったのでぼちぼちでした。チャチャで疲れてきたら少し力が抜けて楽しめたと思います
初めての人と踊るという事で少しわくわくしたので(楽しく踊れたかという5段階評価に対して)「1」ではなく「2」にした)

表7 本実験「今日のダンスは楽しかったですか」の問いに対する回答と思われる、自由記述の抜粋

身長があっていたので、踊りやすかったですし、さわやかな子だったので楽しかったです。
笑顔が素敵で、さわやかな子だったので、踊っていて楽しかったです。
少し踊りにくかったけど一生懸命うまくいくように気を使って努力してくれている感じが伝わってきたから。
1時間(いや30分)でもダンス感を合わせて踊るともっと楽しく高度なものとなる気がします。
普段はこういう機会がありませんので、楽しめたのだと思う。いつもよりよく踊れればさらに楽しかったとは思いますが、そうでなくても十分に楽しめたと思う。
アマチュアに選手っていうのはやっぱりすごいなと思いました。こっちがめちゃくちゃになってもちゃんとついてきてくれたので楽しかったです。
(普段の相手のほうが慣れているので安心感はあるが)今日組んでいただいた方は繊細な感じがして、踊っていてとても楽しかったです。……普段踊る相手とは別の方と踊ること自体が楽しく、わくわくする上、今日組んでいただいた方はリードがとても優しくだったので、踊っていて楽しかったです。……曲も非常に良かったです。
……二人で踊ることを通じて、自分に足りていなかったところを知ることができたり、曲を感じて踊ることができたと思いました。はじめは、初対面ということもあって、かなり緊張しましたが、だんだん緊張が、少しではありますが、ほぐれてきて、上手なパートナーさんと、自分の中で、一緒に踊れた感が少し出ました。自分が踊った動きに何でもついてきてくれました。このような上手なパートナーさんと組んで、フロアを踊っているところがイメージできたり、もっと動きを引きだせるようになりたいな、という目標ができて、とても楽しくて貴重な体験ができたと思います。
方向転換をととてもよく考えてらして、同じ単調なステップでもビクチャーの向きが変わって楽しかったです。
リーダーさんがとても上手で、踊らせてもらってる感覚でした。……最後の方は若干つかれてきてしまっ、足元が動きがにぶくなってしまいましたが、とても楽しかったです。
……普段とはまた違ったリードで、違った自分の躍りを見たような気もしました。

図版出典

図はすべて執筆者が作成したものである。

注

- 1 長谷川みゆき「高校生のダンス授業における導入に関する一考察——社交ダンス(マンボ)の実践を通して」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第56巻、お茶の水女子大学、2003年、181-196頁。
- 2 山口孝治「ボールルームダンスの教材化に関する実践研究 その1——小学校高学年を対象に感想文を手がかりにして——」『京都教育大学教育実践研究紀要』第5巻、京都教育大学附属教育実践総合センター、2005年、97-103頁。
- 3 執筆者が2008年6月から10月にかけて、主に神戸大学と奈良女子大学の大学生を対象に行った「大学生の社交ダンスに対する認識調査」から。
- 4 山口、前掲。および『ボールルームダンス授業化研究事例集(平成14年度～平成19年度)』JBDF、2008年など。
- 5 長谷川、前掲。
- 6 篠田学「学校教育と社交ダンス」『女子体育』第46巻、日本女子体育連盟、2004、66-67頁。
この資料は、JBDFがプロジェクトについて紹介した、ボールルームダンスの教育現場における効用に関する記事だが、組織のこれまでの経験から見出されたボールルームダンスの機能にのみ触れるだけで、その背景となる根拠や資料に乏しい。Christopher R. Stubbs, "Ballroom Dance in University Education: Developing a Learning-Theory Based Curricular Model" Microform Publications, University of Oregon, Thesis, 2000. という論文は、アメリカの大学正課でボールルームダンスをどのように取り上げることができ、心理学や教育学における学習理論と結びつけた分析である。このような包括的な研究に比べると、日本におけるボールルームダンス教育の理論はまだまだ脆弱といわざるを得ない。
- 7 篠田、前掲。
- 8 『21世紀におけるボールルームダンス文化の構築と振興のあり方について——答申——』JBDF「21世紀のダンスを考える会」検討委員会、2001年。この答申では、ボールルームダンスが「誰もが気軽に暮らしの中で享受しうる生活文化となること」を目指し、だれもがいつで誰とでも、生涯にわたって楽しめる生涯スポーツとしてのボールルームダンスのあり方が提唱されている。
- 9 小林由実、宗像恒次、橋本佐由里「中高年者の社交ダンス活動と不安傾向の関連」『高齢者のケアと行動科学』第11巻第2号、2006年、16-25頁。
- 10 本多弘子、鈴木省三、仲野隆士、石三香織「生涯スポーツとしてのボールルームダンスの生理的効果について」『仙台大学紀要』第27巻、仙台大学学術会、1996年、33-41頁。
- 11 長嶋優佳、水村真由美「ボールルームダンス選手における体力特性と競技成績との関連」『体力科学』第56巻第6号、日本体力医学会、2007年、826頁。
- 12 佐藤美弥子、熊澤祐輔、中島幸則、中村豊、河野照茂「ダンススポーツ選手の体力：第1報(トレーニング)」『体力科学』第51巻第6号、日本体力医学会、2002年、706頁。
- 13 板垣明美「ボールルーム・ダンスの身体技法——歩行とコネクションに着目して」『横浜市立大学論叢、人文科学系列』第58巻第3号、横浜市立大学学術研究会、2006年、25-52頁。
- 14 宮下精二、廣田信子、長雄真一郎、富田浩史らによる報告(「Shall we・ダンス? 社交ダンスの実践その後」作業療法17、1998年、100頁)は、精神障害者を対象とした社交ダンスプログラムの報告例であるが、現時点では希少な例といえよう。
- 15 日本で通常行なわれるインターナショナルスタイルのボールルームダンス競技は、スタンダード種目およびラテンアメリカン種目の2種に分かれている。さらに、この2種はそれぞれが以下の5種のダンスで構成されている。スタンダード種目：ワルツ、タンゴ、ヴィニーズワルツ、スローフォックストロット、クイックステップ
ラテンアメリカン種目：サンバ、チャチャチャ、ルンバ、パソドブレ、ジャイヴ
- 16 ダンスの構成として、一歩は「ステップ」と呼び、ステップがふたつ以上つながれ、名前のついたものを「フィガー」と呼ぶ。体操競技やフィギュアスケート競技などの解説で「〇〇難度の技」というときの「技」の概念に近い。そのフィガーを組み合わせたものが「アマルガメーション」で、同じく体操競技やフィギュアスケート競技で技と技を組み合わせた「振り付け」の概念に近いといえる。通常数小節分である。そして、ボールルームダンスの振り付けは、前述の「フィガー」を、ダンスの最中に自由に組み合わせる。また、これゆえに、ふたりのうち一方が、次にどのようなフィガーを踊るのかを合図して知らせる必要がある。これが「リードする」ということであり、この「リードする」者を「リーダー」と呼ぶ。リーダーは通常、男性が務める。
- 17 予備実験は2007年5月26日(土)神戸大学発達科学部C棟音楽室にて実施。対象は以下の通り。
スタンダード種目
29歳男性と19歳女子学生、22歳女子学生の組み合わせから4サンプル、29歳女性と20歳男子学生の組み合わせから2サンプル。
ラテンアメリカン種目
27歳女性と19歳男子学生の組み合わせから2サンプル。
以上8サンプル。アンケートは、踊った際に感じたことを自由記述で回答させた。
- 18 <http://danceanddance.run.buttobi.net/harupict.htm>
立命館大学競技ダンス部公式HP内。(2008年9月10日現在閲覧可)
- 19 http://www.musicmarket.jp/Dance_inter2006.htm
ダンス ミュージック フォノ (2008年9月10日現在閲覧可)
- 20 畑野裕子「ダンスの授業の好嫌を規定する楽しさ要因の検討——中学生を対象として——」『兵庫教育大学

- 研究紀要』第8巻、兵庫教育大学、1988年、133-146頁。
- 21 畑野裕子 「ダンスの授業の好嫌を規定する楽しさ要因の検討(II)——高校生を対象として——」『兵庫教育大学研究紀要』第9巻、兵庫教育大学、1989年、125-139頁。
 - 22 畑野裕子 「ダンスの授業の好嫌を規定する楽しさ要因の検討(III)——大学生を対象として——」『兵庫教育大学研究紀要』第10巻、兵庫教育大学、1990年、113-124頁。
 - 23 長谷川、前掲。
 - 24 ボールルームダンスの、「ふたりで組んで踊る」という、形式に由来する特性を抽出するねらいのもと、「踊りやすさ」という指標も設定した。
 - 25 多次元尺度法は、分類対象となっている項目の関係を低次元空間における点の布置で表現する手法である。似たものは近くに、異なったものは遠くに配置され、近接項目の共通性や、それらを配置する次元空間の軸を設定することができる。さらにこれらの要素の関係や構造を知ることができる。
 - 26 現代日本のボールルームダンス愛好者には、「性、世代、地域による格差」が存在し、「専門化、マニア化、オタク化の傾向もうかがえる」(JBDF、前掲、45頁)。
 少し古いが、余暇開発センターが発行した「レジャー白書2000」によると、ボールルームダンスを含む洋舞愛好者のうち80%は女性であり、そのうちの60%は50代以上の人々である。さらに男性の愛好者は50代以上に限られている。また「レジャー白書2006」には、「社交ダンス」が、参加人口のうち50歳以上が50%以上を占める「シニア化種目」であるという統計も示されていた。白書によれば、この時点での「社交ダンス」の50代以上の比率は63.3%である。
 その一方で「過剰な技術志向」も存在しており、若年層の踊りの場は競技会が主流である(JBDF、前掲、2頁)。その背景にはダンスホールが風俗営業取締法の対象だったことと、それにとまなう「社交ダンス」のイメージダウンがある。日本における社交ダンスの社会史は、永井良和『社交ダンスと日本人』(晶文社、1991)に詳しい。それによると、戦前からダンスホールやダンス教習所は警察関係からさまざまな取締りを受けてきたが、1948年には風俗営業取締法が制定され、ダンススクール、ダンスホールが法的規制の対象となった。関連組織は、「社交ダンス」の健全さをアピールするために、競技団体を整備し、競技会をさかんに開催するようになる。このころ、競技化された社交ダンスという意味の「競技ダンス」という言葉が一般的になっている。現在、大学の社交ダンスのクラブは、ほんのわずかの例外を除いてこの「競技ダンス」部であり、厳しい練習を経て競技会出場を目指して活動している。1995年に競技ダンスの国際組織International Dance Sport Federation/IDSFがIOCの承認団体となつてからは、各国でオリンピック種目への正式採用を視野に入れた選手育成がますます盛んになり、日本でもジュニア層からのダンス選手育成が講じられるようになった。こういった背景から、現代の若年層には「競技型」ボールルームダンスが主流となっている。
 - 27 舞踊の原理についての概論的な説明は柴 眞理子「感性メディアコミュニケーションと舞踊学」(『電子情報通信学会技術研究報告、HCS、ヒューマンコミュニケーション基礎』第102巻第174号、電子情報通信学会、2002年、17-22頁)が詳しい。柴によれば、舞踊の根源は、原始社会での、「全員が同じリズムで踊ることによって、気持ちを共有し、全員が結束するという機能を果たす、いわば社会化のためのコミュニケーション」に始まる。そして、現在でも、「気持ちのつながりや情緒的経験の共有をめざす」、舞踊という「共同体験」は、「自分にはない感じ方、考え方、行動の仕方があることを、またそれまで気がつかなかった新しい自分を発見する場」である、と説明している。
 - 28 「学校体育学習支援プロジェクト委員会第6回会議より」『DANCE my life』第39巻、JBDF、2002年、15頁。
 これからダンス指導を始める現場の先生方を対象に作られた、紹介ビデオの冒頭に競技会のシーンが盛り込まれていた。これに対して、「教育ビデオとして配るのなら、競技会の部分は映画のシーンや卒業式のダンスパーティーなど、ほのぼのとした一般的なダンス風景に変えてほしい」という意見が大勢から挙がったという。また、社交ダンスを知らない先生にとって、社交ダンスというものが最終的には競技会につながるものなのか、競技会出場から始まるものなのかとも判断がつきにくかった、ということも述べられている。

■執筆者について

實方宏海(じつかた・ひろみ)

同志社大学文学部英文学科卒業後、奈良女子大学文学部人間行動科学科スポーツ行動学専攻に3年次編入し、卒業。その後、神戸大学大学院総合人間科学研究科人間行動・表現学専攻博士前期課程を経て、現在同大学院人間発達環境学研究科博士後期課程に在籍中。専門は(1)社交ダンサーの心理学、(2)社交ダンスの社会的意義について。大学在学中はボールルームダンス部(同志社大学舞踏研究会)に所属し、学生競技会に出場。卒業後はアマチュアダンサーとして、研究の傍らアマチュアダンス競技会に出場。

e-mail:sweetvitamyn@yahoo.co.jp

■Notes on the Contributor

Hiromi Jitsukata graduated Doshisha University and transferred to Nara Women's University to write a graduation thesis in the field of ballroom dance. She completed her MA thesis in Graduate School of Cultural Studies and Human Science of Kobe University, and is currently a Ph.D candidate in the Graduate School of Human Development and Environment of Kobe University. Her research interest lies in Psychology of Ballroom dancing and social interest in ballroom dance. She participated in Collegiate championships while a student of Doshisha University as a member of Doshisha Ballroom Dancing Team, and participates in amateur championships at the present.